を略す。)

第 1 圖に依つて其の結果を見るに、Gutenberg 氏のものとは根本的の差違はないが、今回のものは内核中の外部では震波速度は稍小に、内部では稍大に求められて居る。従つて全體として内核を貫く震波の走時は殆んど從來のものとは異なる。この新しい縦波速度分布に依つて計算すれば P' 波の焦點は $\Delta=140^\circ$ に現はれる。

以上今回求めた内核中

の震波速度は、始めに速度分布を假定して求めたものでなく、内核中の走時曲線を定め之より求めた點に於いて意味がある。但し其の結果は、想像される如く、Gutenberg 氏のものとは殆んど同じであつて、氏の從來許容されて居た假設が略正しかつたことを示すのみであつた。

最後に本文に對して重要なことは、 S_0P_0S として觀測されたものが、果して正しくこの記號の示す波であつたか否かと云ふ點、及び從來の内核通過波の觀測は Gutenberg 氏の與へた理論的走時表が基となつて觀測されて居るのであるから、 S_0P_0S 波の觀測から得られるものがどうしても

第 1 圖

地球内核中の P 波の速度分布 (外殻中のもの併示す)

Gutenberg 氏の結果を裏書きする様にしかならないと云ふ點である。之等の問題に解決を與へるには、どうしても全く新しい見地から遠地震觀測を見直して出發せねばならない。機會を得て囚はれざる眼にて地震現象を検する事により此の問題を再検討して見度いと思ふ。終りに、 S_0S , P_0S 波の走時表の作製に對し益田クニモ氏の助力に負ふ所多きを深謝する次第である。詳細は近く歐文彙報に發表の豫定。

(昭和九年五月、於中央氣象臺)

春季淡水硅藻の増殖と營養鹽類及び氣象要素 (第 2 報)

倉 茂 英 次 郎

Spring Diatom Increase in Relation to the Nutrient
Salts and Meteorological Elements. (part II)

By H. KURASIGE.

昭和 9 年 3 月に於る宮城内濠の硅藻特に Syndra の殆んど隔日の定量成績に就ての結果で

ある。

1932, '33, '34 年の植物性プランクトンの極量

の比較は次表の如し

年	1932	1933	1934
平均個體數 (1 c.c. 中)	1,920	1,550	6,430 (5,085)
極最出現日	11,III	15,III	12,III (10,III)

斯くの如き今年の甚しく多量なる原因は 2 月及び 3 月 10 日頃迄の好天氣の爲と思はれる。化學成分の比較は次表の如し。

年	時刻 (h)	日附	水溫	O ₂ %	pH
1933	14	15,III	9.5	116	8.2
1934	10	11,III	5.7	139	8.7

年	SiO ₂ (mg./L.)	P ₂ O ₅	N ₂ O ₅ -N	N ₂ O ₅ -N
1933	5.6	0.007	0.045	0.0075
1934	7.7	0.027	0.011	0.0048

10, 12 日の最大増加は 9~11 日の日照 10 時間以上の好天氣の爲であらう。15 日以後急激な減衰は如何なる環境の不適當によるか 明確な判

断が下せないが pH の 8.6 以上の高値が多少可能らしい要因である。

硅酸鹽は漸減を示して居るに反し、磷酸鹽は數回の山が見られるが其の増加の數日前に風速が高まつてゐる事よりして多分水の攪亂により、底の泥土が表面へ運ばれ P₂O₅ が溶出せるものゝ如く推察される。

硝酸鹽は 2 月下旬 0.05 mg./L. 前後なるも 3 月上旬急減し 3 月 11 日 0.011 mg. となり以後あまり變化しない。亜硝酸鹽は 3 月 13 日 0.01 mg. の最多を示し其の前後は減少して居る。

アンモニウム鹽 極少量は 3 月 9 日の 0.060 mg. なるも 15 日には 0.154 mg. に激増する。

尙詳細は中央氣象臺産業氣象調査報告へ掲載の豫定。

錄 事 Proceedings

七月大日本氣象學會講演會

臨時會 昭和九年七月十三日(金曜)午後四時より中村記念館にて開催、講演七つ。

座長 佐藤順一君 出席者 三十五名

1. 畠山久尙: ベンドルフ電位計に就いて (倉石六郎君代讀) 15 分
2. 杵島 磨: 地震初動の大きさを求める簡単な方法及びその應用 10 分
3. 山本主夫: 地磁氣及び地電流の振動現象について 10 分
4. 池田徹郎: 昭和 9 年 5 月 23 日水澤附近の降雹及びその際観測されたる地盤傾斜 (和達清夫君代讀) 5 分
5. 和達清夫、益田クニモ: 日本列島附近に發生せる深發地震の表 10 分
6. 星 爲藏: 水銀のメニスカスに就て 10 分

7. 日高孝次: (1) Convection Current of Ekman's Type in a Given Solenoidal Field. (2) On the Application of Fredholm's Integral Equations to the Numerical Computation of Drift Currents (荒川秀俊君代讀) 20 分

月次會 昭和九年七月二十日(金曜)午後四時より中村記念館にて開催、講演五つ。

座長 藤原咲平君 出席者 三十二名

1. 久塚清隆: 氣象要素の心理作用に對する影響として見たる市電遺留物件數 (朝比奈貞一君代讀) 15 分
2. 櫻庭信一: 圓形空窩に依る彈性波の散亂の問題 10 分
3. 櫻庭信一: 不定常熱對流の一問題 15 分